

# 第三次世界大戦4

ゴー・フォー・ブローク！

大石英司

*Eiji Oishi*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

插  
画  
安  
田  
忠  
幸

目次

プロローグ	11
第一章 ワンダーバグ作戦	16
第二章 ロシアの影	43
第三章 ダウンタウン	70
第四章 庭園	99
第五章 邦人保護	124
第六章 頓挫	152
第七章 犠牲	177
第八章 抵抗運動	200
エピローグ	217

# 登場人物紹介

## 日本

### 《防衛省》

#### 〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうべい  
土門康平 一佐。ようやく昇進したことで、浮かれ気味。部下には辟易とされている。

#### 〔原田小隊〕

はらだたくみ  
原田拓海 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。コードネーム：K2。

はたけともゆき  
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん  
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ  
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだはるお  
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずのともお  
水野智雄 一曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

たぐちしんた  
田口苾太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ  
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだいき  
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

#### 〔姜小隊〕

かんあやか  
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引っ張られる。コードネーム：マカルー。

うるしぼらたけとみ  
漆原武富 曹長。姜小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん  
福留弾 一曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チエスト。

いいかける  
井伊翔 一曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

みどうそうま  
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこうじ さねあつ  
姉小路実篤 二曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：ボーンズ。

かわにししまきふみ

川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆらしんじ

由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

おだぎりしろう

小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あびるあきら

阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：ダック。

あかばねたくま

赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

### 〔訓練小隊〕

あまりひろし

甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の原田拓海一尉の同期。

### 〈陸上自衛隊 西部方面普通科連隊 (WAiR)〉

しばひかる

司馬光 二佐。西方普通科連隊付き教官。朝霞で婦人自衛官の教育に当たれば一佐に昇進させてやると言われているのだが……。

### 〈第一ヘリコプター団〉

きたぎとみのる

北郷稔 陸将補。

かどくらしげのぶ

角倉重信 一佐。高級幕僚。

いそがいたくや

磯貝拓也 一佐。副団長。

むらたもりと

村田護人 三佐。村田家次男。

むらたりんこ

村田凜子 一尉。村田護人の妹。明野で偵察ヘリに乗っていた。

### 《海上自衛隊》

#### 〔海上幕僚監部〕

うえすぎしんご

上杉慎吾 海将。海上幕僚長。

#### 〔航空集団〕

ねぎまさはる

根木雅晴 海将。航空集団司令官。

おかだやすし

岡田靖 海将補。航空集団幕僚長。

#### 〔南支派遣艦隊〕

たかとおまさや

高遠雅也 海将補。南支派遣艦隊司令を務める。

そめやとしお

染谷俊雄 一佐。首席幕僚。

ばんどうかおと

板東兼人 一佐。"かが"艦長。

かわさか

兼坂すみれ 二佐。艦隊情報幕僚。

### 〔第七航空隊〕

ふじわら みさ  
藤原美沙 二佐。岩国基地第九一航空隊司令。回転翼パイロットとしてスタートし、後に双発に転じ、海自初のジェットであるU-36 Aのライセンスももつ。

まじまけい こ  
真島恵子 二佐。整備中隊を率いる。

くまかわたかし  
隈川隆 三佐。第七飛行隊副司令。

### 〔インド洋派遣艦隊〕

えがわとし き  
江川俊樹 海将補。

たけうちこうすけ  
竹内幸輔 二佐。作戦幕僚。

### 〔ヘリ搭載護衛艦「ほうしょう」〕

いずみ だ せんえい  
泉田宣泳 一佐。艦長。

はしぐちはじめ  
橋口肇 二佐。副長。

みやぎ あすか  
宮城明日香 一尉。気象班長。

### 〈航空自衛隊〉

#### (二〇二飛行隊)

むらた きさと  
村田先斗 二佐。F-35 Aに乗る。村田護人、凜子の兄。

#### (民間軍事会社)

おとなしせいじ  
音無誠次 元大佐。〈サイレント・コア〉の元隊長で、今は自衛隊退役者からなる民間軍事会社を立ち上げてその顧問となっている。偶然ハワイに来ていて巻き込まれた。

こぐれりゅうじ  
木暮龍慈 元一曹。狙撃手。音無の部下。二〇年前に自衛隊を引退してからは、北海道でマタギとして暮らしていた。コードネーム：ジャッカール。

## //// アメリカ //////////////////////////////////////

### 《アメリカ合衆国大統領行政府》

エリザベス・ケンジントン 大統領。

ケイティ・ヘンドリクセン 國務長官。

コリン・コンラッド 大統領首席補佐官。アマンダ・マクノートンの上司。

アマンダ・マクノートン 新補佐官。安全保障問題担当次席補佐官から国家安全保障問題大統領補佐官へ就任。

クインシー・ショー ホワイトハウス広報室長。

### 〈海軍〉

〔南シナ海派遣部隊〕

マイケル・ゴトー 中佐。南シナ海派遣部隊参謀。三代続く日系人。

### 〈陸軍〉

〔第25歩兵師団隷下 第4空挺旅団 “スパルタン”〕

クラーク・マッケンジー 中佐。大隊長。

カイル・バタスキー 中尉。第501落下傘歩兵大隊 “ジェロニモ”、本部管理中隊付き偵察小隊を率いる。

トーマス・ワン 曹長。小隊を纏める補佐役。

マサミチ・ドウモト 伍長。

マック・キム 一等兵。韓国系。

ケイコ・ノックス 一等兵。

〔第7エンジニア・ダイブ分遣隊〕

ブルース・イノウエ 大尉。

ジミー・ボラード 伍長。

### 〈海兵隊〉

セリーヌ・D・タッカー 海軍少将。少将に出世したばかりの女性。

(レジスタンス)

タケル・サトー 少佐。ハワイでルーカス・カトーのバイト先であるガンショップを経営。七〇歳を超えているが、銃の腕は確か。

チヨコ・サトー タケル・サトーの孫娘で、ルーカス・カトーの幼馴染み。

ルーカス・カトー ハワイ大学マノア校で機械工学を学ぶ青年。チヨコとの写真が “アラ・ワイ運河の恋人” として、全世界の注目を浴びる。

## 中国

### 《中央弁公庁》

ファンジュエマオ  
範 学毛 中国共産党中央弁公庁主任。

## 〈陸軍〉

ウェイリイシイシン  
韋立新 少将。

ロンブワンフェイ  
龍鵬飛 少佐。世界の奇襲戦法が専門。日本のアニメオタク。

### 〔第一〇八特別監察旅団〕

ウビン リンカン  
武彬 林剛の元上官。彼をスカウトした。

リンカン  
林剛 中佐。

タオ ツ モ  
陶子黙 一級軍士長。

### 〔第一〇一待機旅団〕

イエシュイトン  
葉旭東 少将。

トゥツ チイエン  
杜子健 大佐。参謀長。

チワンチウオファン  
程卓凡 大佐。政治将校。

リュイチイティアン  
呂志强 海軍予備役大佐。“シー・オブ・カシオペア、(一二五〇〇〇トン) 船長。

スットン  
蘇桐 中佐。情報参謀。

ツァイムウチン  
蔡慕青 中佐。女性部隊を纏める。

シイモン  
石萌 少佐。元々はハワイ島攻略部隊の情報参謀だったが、負傷した杜子健大佐より参謀長職を託され作戦参謀兼参謀長代理になる。

チンユイタン  
金語堂 大尉。

クッハオ  
顧浩 中尉。慎重な性格を見込まれ、金大尉に部下ごと引き抜かれた。

レンシエチン  
任学軍 曹長。

## 〈空軍〉

ファンシン  
方星 中佐。優秀な戦闘機パイロットだったが、数年前結核に罹り、それを機会にコクピットを降りていた。

ハオ ス  
郝思 中佐。護衛の戦闘機部隊を率いる。

## //// シンガポール //////////////////////////////////////

クー・シェンロン 国防大臣。若く野心家で知られる男。

ウン・テクバ 外相。議会の古株で、滅多に感情を表に出さない男。

ヤオファンファン  
姚芳芳 クー・シェンロン国防大臣の妻。香港人で元民主運動家。





## プロローグ

伝記作家、フィオナ・J・トンプソンの記録より――。

大統領首席補佐官・コリン・コンラッドの証言。

「――そつだな……。ミスはあった。明らかかなミスだ。一九八二年の三月から四月にかけて、私はたまたまロンドンに滞在していた。アルゼンチン軍がフォークランド諸島沖に現れた時、イギリス人は皆、自分の耳を疑っていたよ。兆候は、もちろんあった。それは、9・11の悲劇

にしてもそつだ。しかし、われわれは完璧ではない。まさか、東シナ海がホット・ウォーと化した遥か以前に、中国が行動を起こしていたなんて誰が予想できたと思っね？ あれはまさにへパールハーバ―だった。青天の霹靂攻撃と言っている。普通、あの程度の兵力で、アメリカを直接侵略しようなんて考えない。日本だって、港湾の戦艦を沈めるのが精一杯だったのに」

――エリザベス・ケンジントンは、アメリカの憲政史上、初めて合衆国領土へ

の直接侵攻を許した大統領として歴史に記録されるわけですが……。

「ならば、憲政史上初めてそれを撃退した大統領として、歴史を上書きするまでのことだ」

——オアフ島が占領されてからすでにかなりの時間が経過したのに、軍はまだ反撃できないと聞いています。

「侵略から、まだ二日三日だ。部隊を動かすには、膨大なエネルギーが必要になる。領土防衛だといっても、軍の犠牲を無視して部隊を投入できるわけではない」

——楽観的に聞こえますね。

「オアフ島が占領されたが、中国軍はホノルル市街地に立て籠もったままだ。ヒツカム空軍基地とパールハーバー海軍基

地は占領されたが、敵は持て余している。それらの基地にある膨大な機密を暴く暇はないだろう。レジスタンス活動は、その限られた戦力を超える戦果を上げ、敵にかなりの人的犠牲を強いている」

——落としどころを考えていますか？ このまま、中国軍を全滅させた後のことを。中国は、大混乱するでしょう。また、核で報復してくるかもしれません。その辺りのことについては、まだ大統領とは議論したことはない。そんな暇はまだ無くてね。民主主義が全てを解決するわけではないが、中国もそろそろ一党独裁に別れを告げるべき時だ。ところで君の仕事は、作戦の詳細や中国の未来を案じるのではなく、二期目を終えた後の五年後あたりに、大統領の伝記を書く

ことでは？」

——ええ。それが来年でなく、五年後であることを祈っています。パールハーバーの奇襲上陸から大統領が人前に現れたのは、議会での演説のみです。ご様子は、いかがでしょうか。

「別に、打ちのめされてはいない。知つての通り、彼女は逆境にこそ闘志を燃やすタイプだからね。スタッフも同様に、睡眠不足ではあるが、やるべきことをやっているよ。国防総省では、しゅくせい 粛清の嵐あらしが吹き荒れるだろうが、少なくとも今じやない。この戦争が終わってからのことになる。大統領は、経験豊富だ。かつてはファースト・レディとして八年間をここで暮らし、國務長官として四年間、世界を飛び回り、その間には、リビアの

領事館襲撃事件で辛酸しんさんも舐めた。打たれ強さは君も知つての通りだ。タフな人だよ」

——タフ？ 今朝方、広報室長のクインシー・シヨーが疲れ切つた顔でプレス・ルームに現れて、オフレコでブリーフィングしましたよね。私は、彼の発言の全文記録をもっています。取材したところでは、大統領は、中国軍がレジスタンスを攻撃した際のあの動画で、最後に映っていた二人の若者に関し、酷く動揺したということですが……。

「動揺とは、大げさだな。だが、意見の対立があつたことは事実だ。大統領が二人の安全の確保にこだわつたので、私が窘めた。今はそれどころではないとね。それで、彼女が少しだけ……声を大きく

しただけだ」

——声を荒げて、ティッシュボックスで机を叩いたとか。

「そんなことまで、つかんでいるのか……。きっと、この件は君が書くこの章のハイライトになるだろうな。確かに、そのやりとりをしたよ。残念だが、私の意見は通らなかつたが」

——大統領が女性だから、そんな判断になつたと思えますか？

「いや、それは関係ないな。あの『アラ・ワイ運河の恋人』と呼ばれている動画に登場した若者二人は、確かに気の毒な境遇だ。あんな場所で銃を持って、戦つべきじゃない。この意見の相違は、強いて言えば兵役の経験の有無だろう。知っているだろうが、私の父は朝鮮戦争で戦

死した。それが意味ある死だったか、今でも自分に問うことがある。貧乏学生だった私もキャンパスからベトナムに出征し、戦場の理不尽な様相をつぶさに目撃した。戦争は、無慈悲なものだ。誰かが民間人だから、あるいは父親が戦場ですでに犠牲を払ったからという理由で特別扱いしていたら、それこそきりがなくなる。戦場に、そんな余裕はない」

——ですが、今後ハリウッド映画のように、その二人を救い出すために、特殊部隊を送り込むんですよね。

「その後、クインシーと話をしたのだが、それで国民の士気を鼓舞することができるとすれば、戦場のヒーローやヒロインという存在は、決して無意味ではないという結論に達した。……まあ、そういうこ

とになるだろうな。私としては、貴重な部隊を、こんなことに使ってほしくはないが。パブリシティの材料として、若者二人を持ち上げた以上、もし二人に何かあったら、叩かれるのは政権であり大統領だ。この件は、慎重に扱う必要がある。もちろん、私も二人の無事を祈ることに変わりはないよ」

ドアがノックされ、国家安全保障問題担当大統領補佐官のアマンダ・マクノートンが顔を見せる。

「お呼びですか」

「ああ、アマンダ。昨夜のやりとりに関して、フィオナに五分だけ説明してくれ。第三者の客観的な評価と背景説明が必要だ」

「わかりました。でも、そんなに大事な

ことですか？」

「後日、この戦争を振り返った時、このことはどういふ結末を迎えるにせよ、一つのハイライトになる」

コンラッドが肘掛け椅子から立ち上がり部屋を出ていくと、代わってアマンダ・マクノートンが、若干警戒するような表情でその椅子に腰を下ろした。

フィオナは大統領の大学時代からの友人で、何を喋っても、いざその本が出るまでは一切漏洩ろうえいすることはないという話だったが、どこまで喋っていいか迷うところなのだろう。

勝ち戦というには、まだほど遠い状況だったからだ。

## 第一章 ワンダーバグ作戦

ダニー・ジェンキンス少佐は、朝日が眩しい早朝のホノルル市内を歩いてた。

短パンから覗く左足には、太股から膝下まで幾度にも及ぶ手術痕があり、軽く左足を引きずって歩く。街を封鎖ふうさしている中国軍の兵士も、スニーカーを履はいた彼の歩き方に一瞬を目を止めるが、その醜みにくい傷跡を見ると顔を背けた。

兵士らは、街を歩く住民やジョギングの習慣を変えない観光客たちよりも、狙撃の方を恐れて、始終周囲の建物に注意を払っていたため、パトロールの体を成していない。

実際、遠くからは銃撃音が時々聞こえてくる。

単発なことから、レジスタンスによる狙撃だろう。銃撃音などを聞くと、ジェンキンスは今でもフラッシュバックに囚こわれることがある。

悪夢うなに魘うなされるのはしょっちゅうだ。あの戦場から生還せいかんして一〇年を経る今でも、それが終わることはない。

心停止による臨死体験、一年に及ぶ退屈な入院生活と、数年がかりの大手術、それに続く長いリハビリ、破綻はたんした結婚生活……。

だが現在は、そういった試練に打ち勝ち、自分の足で歩いている。

あの時、一人の戦死者も出さずに戦場から生還

した彼の物語は、今やアフガン戦争の伝説と化していたが、こうして街に溶け込めば、彼の正体に気付く者もない。

もつともここでの彼は、歴戦の勇者ではなく、陸軍の心理カウンセラーで、心的外傷後ストレス障害の治療を専門としている。

この二四時間は、大忙しだった。

医療スタッフの一人として負傷兵のトリアージに参加し、基地に避難してきた住民や観光客を励まし、心理戦部隊の将校として軍の反撃計画の評価も行わねばならなかったからだ。

もう少し身体が自由に動けば、自ら部隊を率いて作戦に参加できたのだが、それは適わない。

一〇年を超える中東での不毛な戦争は、多くの兵士達の心に消せない傷を作っている。

心理学の博士号を取ってみてわかったことは、結局はトラウマ的体験は、それを圧倒する成功体

験を経ることではか解消されないということだ。

兵士に関して言えることは、負け戦の傷は、次の戦争に勝利することではか癒えないということ。

この戦争は、中東で戦った多くの兵士にとって「癒しの戦争」になるだろう。

勿論、紆余曲折あるだろうし、兵士もレジスタンスも大勢死ぬだろうが、われわれは祖国と、土地を奪い返したという成功体験で、物語りを終えることになる。

そう考えながら、ジェンキンス少佐は地元民しか訪れない平屋建ての寂れたバーへ向かった。

ドアの奥から外を見張っていたレジスタンスの一人が彼に気付くと、素早く室内に招き入れた。

灯りが消えた室内では、男たちが寛いでいる。というより、半分はソファや床で爆睡していた。

異様なのは、ほぼ全員が銃を抱いていることだろうか。

キッチン、奥から、老人が一人現れる。

「デッドロック・ダニーじゃないか！　なんで君がこんな所にいるんだ!？」

「お久しぶりです、タケル・サトー少佐。四四二連隊のパーティー以来ですね。自分はまだ、陸軍の現役少佐ですよ。……こんな身体になっても、元グリーンベレー指揮官、心理戦のスペシャリスト。私にも、まだできることがあるのは光栄です」

「……君である必要が、本当にあったのか」

「軍が、そう判断したのです。私の話なら、貴方も耳を傾けるだろうと。……状況は、把握しています。昨日の攻撃は見事でした。その後、変化はありませんでしたか？」

「敵は、司令部の場所を変更したよ。隣のホテルに引越した。立て籠もるかと思つたが、パトリールも再開している。かけてくれ、カウンターでいいか？」

「キッチンにしましょう。少し、微妙な話なので……」

ジェンキンズ少佐は、室内を見渡しながらそう言った。

レジスタンスの全員には聞かせたくないというニュアンスで伝えると、客席の奥から、明らかにレジスタンスとは異なる雰囲気の方が近づいてくる。

「デッドロック・ダニー？　少佐が、連絡役ですか!？」

驚いた顔で、その男性——トーマス・ワン曹長が軽く敬礼してきた。第25歩兵師団隷下第4空挺旅団「スパルタン」の第501落下傘歩兵大隊「ジェロニモ」の先遣偵察隊を率いて潜入してきたらしい。

「ああ、曹長。君が「ジェロニモ」を率いてきたのか。……では、奥で話そう」

それを聞いたサトー少佐が、キッチンで朝飯を作っていた民間人の若い男女へ、外へと出るよう命じたが、ジェンキンス少佐は「あの二人にも、関係あることなので」と二人を留めた。

三人も立てば身動きが取れなくなる狭いキッチンに、関係者がひしめき合う。

「何か飲むかね？」

「水で」と応じたジェンキンスは、興味津々という顔で、民間人の若者らの顔を見遣った。

換気ファンのスリット部分から差し込む日差し

だけで、二人は全員分の朝飯を作っていたようだ。

「チヨコ・サトーさんに、ルーカス・サトー君だね。ああ、チヨコさんは、サトー少佐に良く似ていますね」

「そうかい？ 近所の皆は似てないと言うんだが」と、サトーがまんざらでもないという顔で言った。

「ルーカス君、私は君のお父さんと同じ部隊にいたことはないが、戦死なされた頃、同じアフガンにいたんだ。……残念だった。私はこうして生還できたのだが」

「シルバースターの勳章付きでな」とサトーが付け加えた。

「皮肉なものです。路肩爆弾で死んだ兵士の名前は誰も覚えてはいないのに、ただの負け戦でも、生きて還れば分不相応な勳章を貰って、軍のサイトに名前が残る」

「君があの時、あそこで成し遂げたことと、その後のリハビリの苦勞を思えば、君こそ叙勲に値する兵士だろうに」

「ありがとうございます。——ところで、本国の状況に関して、何か聞いていますか？」

「短波ラジオは聴いているよ。よくわからんのだが、チヨコとルーカスの二人が、どうかしたの

か？」

ワン曹長も怪訝けげんそうな顔で言う。

「自分も、部隊から衛星携帯で命令を受けました。チヨコ・サトーとルーカス・カトーの安全に万全を計れ。決して戦場に出すな」とのことですが……一体、何事ですか？」

ジェンキンズ少佐は、ズボンのポケットからスマートフォンを取り出すと、保存しておいた動画をその場で再生してみせた。

「これ、曹長が送ったもんだらう」

「ええ、何人かで分担して撮影したデータを、未編集で送りました。編集作業は、軍で行ったようですが……」

昨日の敵司令部襲撃の様子が映っている。最後に、日系人部隊のスローガンだった「当ゴ－た・つフオー・て・砕ブローク！」と、海兵隊のスローガン「一ワン・人・はフオー・皆・のオール・ため・にオール・皆・はフオー・一人」

ワン」と書かれたTシャツを着た二人が、銃撃を受けながらアラ・ワイ運河を泳いでいるシーンが収められていた。M14を背中に担ぐルーカスに溺れおぼれそうになったチヨコが「アイ・ラブ・ユー！」と抱きつくシーンだ。

二人のすぐ脇では、銃弾による水しぶきが激しく上がる壮絶なシーンでもある。

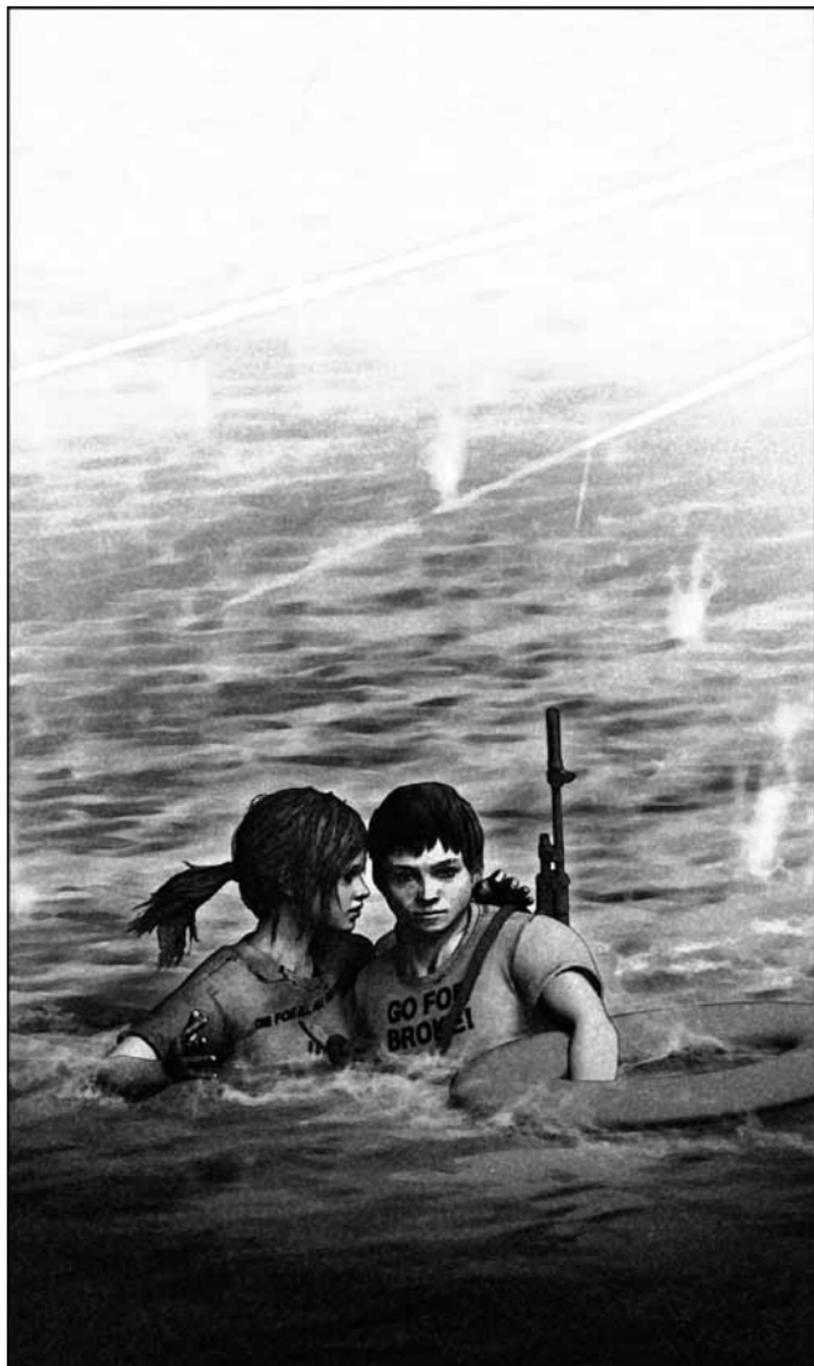
当の二人も、今初めてその動画を見たようだ。

「へえ……まるで、ハリウッド映画みたいだ」

ルーカスは、他人事のように言った。

「この動画は、たぶん、ネットで今年一番再生される動画となるだろう。今現在も世界中で拡散され続けている《アラ・ワイ運河の恋人を助けろ！》という運動が起こっている。たった一日で。十数秒のこの動画によって、君たちはアメリカ世論を動かしたんだ」

「恋人って……別に、ルーカスとは恋人という関



係じゃないけどね。あの時は、とっさに言っちゃったけど……」

恥ずかしそうに、チヨコが小声で弁明している。

「ちよっとした疑問なんだが、ルーカス君はともかく、チヨコさんはどうして海兵隊のTシャツを着ていたの？ 君の家は、生粋きんすいの陸軍の家系のはずなのに」

「ああ、あれは魔除けなんですよ。私、スーパーのレジ打ちをしています。時々、陸軍基地の兵隊さんが絡からんでくるというか、誘うつてくるんです。それが、鬱陶うつとうしくて。だから、日替わりで海兵隊のTシャツを着ることにしているんです」

「なるほど。それは効果観てきまけん面めんだろうな」

二人は、今は動画とは別のTシャツを着ている。「実は、私がここを訪れたのは、大統領命令を伝えて履行するためです。二人の若者を速やかに戦場から離脱させ救出せよとの命を、軍は受けてい

ます。これは、最優先命令です」

これを聞いたサトー少佐は、「はあ？」と語尾を上げた。

「戦争中だぞ？ 真面目な話なのかね」

「はい、大まじめな話です。もし二人に何かあれば、この戦争の将来像に関して、国民に深刻な疑念を抱かせ、軍も政権も大きなダメージを受けると判断しています」

「馬鹿馬鹿しい……」

「それで、チヨコさんとルーカス君には、いったん陸軍の支配エリアまで下がってもらいたいです。あと——ここからは私からの提案なのですが、二人の替え玉を立てたいと思っています。勝手なことをして申し訳ないのですが、時間が無いのですでに替え玉工作ははじめています。ワン曹長が連れてきた二人の日系人の部下、その二人に入れ替わってもらいたいのだが」

「なぜ、そんなことをする必要が？」

曹長が尋ねた。

「中国軍も、すでに君ら二人を探している。それも、最優先事項として。この中国軍の動きをどういうルートで得たかは、私も知らない。スパイなのか、無線傍受なのかはわからないが、確実に言えるのは、君たち二人の安全が脅かされていること。だが、それを逆手に、二つの作戦が立てられる。一つは、替え玉を立ててそれを敵に追わせること。もう一つは、あのTシャツを量産して住民や観光客に着用を奨励し、抵抗の意思表示とすること。もちろん、レジスタンスにも着てもらいます。陸軍と海兵隊で、これから業者を当たります」

「海兵隊のは知らないが、ゴー・フォー・ブロークのTシャツは、生地は中国製だがプリントは島内だよ。売り上げの一部は、連隊の財団に寄付さ

れている」

「ちよ、ちよっと待ってください!!」

呆気にとられていた曹長が、ここで慌てて口を挟んだ。

「あの、入れ替わると言っても、うちの部下は日系人というだけで、顔は二人とまるで違います！」

「心配ない。国家安全保障局<sup>A</sup>が、今総力をあげてネットワーク上の情報を書きかえている。ワンダーバグと呼んでいる凶悪なワームがある。私はそのワームの初期型を、中東のとある科学研究施設に仕込む作戦に従事したことがある。いわゆる、スタックスネット型のワームだ。イランの原子力施設破壊にも使用されたものだね。ハワイのネット環境は封鎖状態だが、君たちもSNSくらいやっているだろう？」

「はい、私はインスタグラムだけです。でも、

近所の猫や夕焼けを撮ってアップするだけで、見てくれる人は、ルーカスを入れても二〇人いるかどうかです」

「俺も、大学に入った時に連絡事項はネットでするからと、フェイスブックのIDを強制的に作らされた。俺は友達がいらないから、今は死んでいるけれどね」

そう二人は答える。

「それらのサーバーは基本的に本国にあつて、今でも自由に見られるし、中国だってハッキングできる。メディアは、君たち二人の正体を詮索せんさくしないよう国民に呼びかけているが、実名が出るのは時間の問題だろう。ワンダーバグは、オンライン状態のネットワーク全てに侵入し、君たちの名前や痕跡を発見すると、片っ端から消していく。証拠を残さずにね。ルーカス君が大学に存在した記録は、一切消え失せる。ハイスクールにいた記録

もだ。そして、当たり障りの無い場所に、完璧に画像処理を施した替え玉二人の写真をはめ込んでいく。その作業は、実はもう完了している。必要があれば、二人には新しい名前と身分も用意するが——」

「ちょっと待ってください!! それって、俺たちの意思是、関係無しにですか?」

ルーカスが不機嫌な顔で言った。

「問題はそこなんだ、ルーカス君。これがハリウッド映画なら、君ら二人は軍の申し出を毅然きぜんと断り英雄として戦い続けるだろうが、これは映画では無い。私としては、君たちがこの申し入れを受け入れてくれることを望んでいるが」

そう言うと、ジェンキンスはスマートフォン画面を切り替えて、あるテキストを読み上げた。

「大統領からの君たち二人への言葉だ。——ミスター・カトー、ミス・サトー。貴方たちの無私の

献身に、敬意を表します。貴方たちの勇敢な戦いに、一人の合衆国市民として最大級の賛辞を表します。オアフ島民がおかれた苦難を思うと、胸が痛みます。しかし、合衆国大統領として、貴方たちが速やかに戦場から避難してくれることを望みます。貴方の家族は、国家のためにすでに十二分な献身と犠牲を払いました。貴方たち二人が、平和を取り戻した島で静かに暮らせることを祈っています。——以上だ」

「俺は民間人だから、大統領からあれこれ指図を受ける理由はないですよね」

「まあ……：幸か不幸か、そういうことになる」

「爺さんの意見は？」

ルーカスは、サトー少佐に向き合った。

「論外だ。この島は、俺たちの故郷だぞ！ ナチスを倒していくとか、アフガンの山の中でアルカイダを追いかけるとは訳が違う。お前は逃げた

いのか、ルーカス？」

「別に……。俺、これまで鍛えられたお陰で、銃の扱いはこれらの兵隊さんよりうまくなった自信はあるし。あと、これは格好付ける気じゃないけど、爺さんみたいな年寄りが戦ってるのに、俺が逃げるのって、後味が悪いよね」

「逃げるも何も、君らは十分に戦ったと思うよ。軍隊だって立ち直りつつある。レジスタンスの出身は、これから減るさ」

「ぜひ、そう願いたいよね」

サトーが、信じてはいないという顔で応じた。

「私も！ 私もお爺ちゃんの世話があるから残ります。それに、よくわからないけど、替え玉を立ててもらえるなら、私たちが狙われることは無いってことでしょう？」

「中国軍が、こちらがばらまいた偽の写真に飛びついて、顔写真を頼りに探すならね。ただし、別

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。